

平成三十一年度
名寄市立大学
推薦入試・社会人選抜

小 論 文 問 題

試験時間 一〇時〇〇分～一一時三〇分（九〇分）

*受験上の注意

- ① 指示があるまで開いてはいけない。
- ② 指示に従って、静粛に行動すること。
- ③ 机上には、受験票、筆記用具、消しゴム、鉛筆削り、時計、眼鏡、目薬、袋・箱から出したティッシュペーパー以外、不要なものは置かないこと。
- ④ 質問、用便その他、特に必要のある場合は静かに手を挙げ、指示を求めること。
- ⑤ 不正を行ったものは試験を中止し、以後の受験資格を失うものとする。

次の文章を読み、あとの間に答えなさい。

自己中心的な振る舞いが多いと見なされている現代の若者だが、相手に非常に気をつかっている面もある。それが「空気を読む」ということであり、その場にふさわしい話題しか持ち出さないという意味での気づかいが不可欠のものとなっているようである。

だが、自分のどういう面は出しても良いが、どういう面は出してはいけないというような判断を相手ごと、場面ごとにするのは、何とも面倒な作業だ。そこに登場した便利な装置が「キャラ」だと言って良いのではないか。

「あいつは〇〇キャラだから」

「あの子は△△キャラなのよね」

といった言葉をよく耳にするようになった。たとえば「天然キャラ」ということにすれば、空気を読めなくても許される。「鉄オタキャラ」ということにすれば、いつも自分の好きな鉄道ネタばかり話してもウザがられない。自分は「〇〇キャラ」であると公に示してしまえば、いつもその面だけを出していればよいのだ。

(中略)

2014年に全国の16歳以上を対象に実施された、文化庁による「国語に関する世論調査」では、「人と接する際、相手や場面に合わせて態度を変えようとする方か」を尋ねている。その結果、「相手や場面に合わせて態度を変えようとする」と言う者は、10代では63.4%、20代では68.7%と3人に2人の比率になっているのに対して、30代(54.9%)・40代(52.1%)・50代(45.0%)では5割前後、60代(28.2%)では3割以下、70代(18.7%)では2割以下となっている。このような結果を見ても、今の若い世代においてとくに空気を読む傾向が強いことがわかる。

そのような若者たちは、周囲から受け入れられるために、どんな自分を出せばよいか悩む。そんなとき、友達集団の間で認知されているキャラがあると助かる。

今の若者の間では、自分がどんなキャラを立てるかは、非常に重要な問題であるようだ。いったんあるキャラを確立すれば、いつもそのキャラでみんなに対すればよいのだから、いちいち相手との関係を考えずにすむので、ある意味では気楽と言える。

だが、自分のキャラに反する言動は一切控えなければならぬという窮屈さも同時にあ
るのだ。

キャラを演じていけば、いちいちその場の空気を読んで自分の出方を調整する気苦労から解放される。ところが、その便利きわまりないキャラが、自分を抑圧する装置でもあるのだ。キャラという装置に依存している限り、自分の一面しか友達に対して出すことができない。

人間というのは多面的な存在だ。いろんなことを感じ、いろんなことを考える。いつもギヤグばかり飛ばして周囲を笑わせているキャラの子だって、ときには深刻に悩むこともある。芸能ネタばかり話しているキャラの子だって、進路についての不安をだれかと分かち合いたい思いに駆られることもある。でも、キャラと言う装置に依存する限り、キャラに反する自分の思いはすべて抑圧し続けなければならない。

そのため、キャラを演じるのに疲れるということが起こってくるのだ。友達の前では、自分のホンネを隠して、ひたすらキャラを演じ続けなければならない。自分のホンネを抑え、キャラに徹することで周囲に溶け込む。それによって自分の立ち位置を確保する。そうした適応様式をとることで、キャラから抜け出せない苦しさが生じるのである。

そこで、「キャラ変えしたい」ということになる。

「今の自分のキャラに縛られて生きるのはもうイヤ。キャラ変えしたい」

という人の話を聞いてみると、今のキャラでは出しにくい面を出せるようなキャラを模索中だと言う。そんなややこしいことをせずに、素の自分でいけばいいのではないか、キャラを変えたところで、つぎのキャラだって出し切れない面がたくさん出てくるだろうにと、こちらが感じる疑問を投げかけると、

「もちろん、別のキャラに変えたって、今度はそのキャラに縛られるのはわかってる。でも、それは仕方ないんじゃないですか。キャラなしでやっていくなんて考えられない」と言うのだ。自分がカタツムリで、キャラがカタツムリの殻。殻がなければカタツムリ

が生きていけないように、自分もキャラがなければやっていけないと思いついてるようなのである。確かにアニメの登場人物には、作者によってあてがわれたキャラが必ずあるものだ。でも、生身の人間はもっと多面的な自分を素直に出してもよいのではないか。

キャラを演じるのに疲れながらも、キャラから抜け出すことができない。滑稽ではあるが、今の若者にとっては重たい問題なのかもしれない。それほどまでに空気を読んでホンネを抑えなければならぬという圧力が強いということなのだろうか。ビジネスの会議や交渉の場ならともかく、友だちや親友と呼ばれる相手とのつきあいでもキャラに縛られホンネを出せないなんて、ちょっと淋しくはないだろうか。

（『上から目線』の構造〈完全版〉 榎本博明著 日本経済新聞出版社 二〇一八年より）

問一 傍線部「キャラを演じるのに疲れながらも、キャラから抜け出すことができない」のはなぜか。筆者の考えを二〇〇字以内で説明しなさい。

問二 キャラを演じることについて、あなたの考えを六〇〇字以上八〇〇字以内で述べなさい。